

展望

学生文化への関心

自分の研究をふりかえる

武内 清

私の専攻は教育社会学で、その中でも、学校や大学の制度や文化の仕組みを、生徒や学生の側から見ていこうとするものである。

教育社会学は、教育の社会的側面に関心を向けているので、あまり個人的なことに言及することは少ない。教育学の研究者の研究テーマや教育内容は、どこかその人の生育歴や教育歴が関連しているように思われる。教育社会学の研究者にもそれが言える。個人の成長過程でのさまざまな経験が知らないうちに研究に反映される。

近頃の大学院生の研究テーマは、自分探しになっている。研究は自分のために行うのではなく、社会のために行うものである。テーマは、社会的なものが選ばなければならない——これは、年配の教育社会学の研究者が、若い世代の研究テーマに関して共通に持っている感想である。しかし、教育社会学の研究といえども、個人的な経験がどこか研究テーマに結びついているのではないか、自分探しと社会的な問題との結びつきが可能ではないかと感じてきた。

学生運動の世代は、マルクスや吉本隆明などを読み生き

方の指針にしていたが、学生運動が挫折した後の世代は、フロイトやユングなど心理学を読んで生きる指針を探し始めた。社会的要因を抜きに心理的に解決しようとする心理学主義が蔓延している——このように感じている社会学者は少なくない。しかし、社会学研究も、心理的な側面も取り込むようになっていく。また逆に心理学も社会的側面を取り込まざるを得なくなっている。社会学と心理学の研究は接近しつつある。

自分自身のことを振り返ると、伝統のある自由な雰囲気のある都立高校で過ごした三年間の高校生活は、その後の研究テーマに影響を与えている。受験競争の真つ只中にいながら、H.R.、生徒会活動や部活動が重視された当時の都立高校の雰囲気は驚きであり、大変影響を受けた。しかし、東京の中流上層階級の文化を反映した都立高校の学校文化は、中の下階層出身の私には適応が難しかった。クラスメイトのするスポーツは私には馴染みのない硬式テニスやラケットであり、話題は私の知らないゴダールの映画であったり、ジャズの音楽であったりした。政治意識も高く、安保反対のデモに参加する学生も少なからずいた。英語の授業では、『動物農場』『ウィンズバーク、オハイオ』『月と六ペンス』といった文学的な作品がサイド・リーダーとして指定され、皆楽々とこなしていた。学校文化と出身階層と

戊果

の関係に関心をもったのは、この高校時代の文化体験（葛藤）にもとづいている。

都立高校の高校の学校文化をやっと少し身につけ、大学に入学したと思ったら、そこは全国津々浦々から学生が集まった「田舎文化」の蔓延した国立大学で、また文化葛藤を味わう羽目になった。このような出身階層、地域と学校（大学）の文化葛藤、個人のハビタス問題は、現在の私の研究関心に底流している。

高校の格差、高校生の生徒文化

団塊の世代の子どもが学校に入学、進学するようになった時、その量の多さからさまざまな教育問題が起こった。特に、団塊ジュニアの高校進学時には、各県で高校増設が相次いだ。

大学院・助手時代、私の参加した共同研究に、「高校の適正規模の総合的研究」（研究代表・清水義弘・東京大学教授）というものがあつた。それは、これから各地で新設される高校を、どのくらいの規模のものにするのが適切かというきわめて時宜にかなつたテーマの研究であつた。

共同研究者で手分けして、調査の依頼の為、各地の高校を訪問した。私は生徒の学校生活の側面から、どの規模の

高校が、高校生の学校への適応や進路によい影響を与えるのかを検証した。しかし、データからは学校規模と高校生の学校適応や進路に何ら関連が見出せなかった。困り果てそこに大学進学率で分類した「高校の格差」という変数を投入してみると、「高校の格差」ごとに生徒の生活や意識の違いがはっきり分化していることを発見した。高校生の生活や意識(生徒文化)の特徴は、進学校では「勉強文化」(Academic Subculture)、準進学校には「遊び文化」(Fun Subculture)、非進学校には「逸脱文化」(Delinquent Subculture)が優位になることが統計的に明らかになったのである。学校規模より「高校の格差」が、生徒文化を分化させる要因になっていた。また、伝統ある進学校では指導体制が確立しているので、学校規模を大きくしても、教科指導や生徒指導の問題は起こらないが、新設の非進学校で大規模校になると指導が確立していないため、生徒の逸脱行動が発生しやすく指導が難しくなっていることもわかった。この調査研究から、学校格差と生徒文化の関係、さらにはそれらと学校経営の関連に関して、新しい知見を得た。

個人の研究では、出身階層がほぼ同一の私立進学高校で、「私にとつての高校生活」というテーマのレポートを書かせたところ、その内容と学業成績(全教科)との間には、はっきりした関連があることがわかった。成績上位者は勉

強文化、成績中位者は遊び文化、成績下位者は逸脱ないし無気力な生徒文化が優位となっていたのである。学校間の格差同様、学校内の格差(成績)も、生徒の行動の規定要因になっていたのである。

「生徒文化」の研究は、ベネッセの『モノグラフ・高校生』調査で、その後継続して行った。

大学レジャーランド時代の学生文化

大学生の学生文化への関心は、都内の私立大学に専任講師として勤務し、学生たちと接している中で芽生えた。勤務した中堅私立大学の学生の大学生活は、私の過ごした国立大学のそれとは大きく違ったものであった。

当時「大学のレジャーランド化」が言われた時代でもあり、学生たちは過酷な受験勉強から解放され、企業戦士として働くまでのつかの間の四年間の休息(モラトリアム)を楽しんでいた。学生たちは、受験競争で敗れた傷も負っており、その傷を癒すために、レジャー(遊びや交友)に没頭していた。サークル活動、コンパが盛んで、その資金のためのアルバイトもして、授業への出席率は二―三割程度であった。テレビドラマ「不揃いのリンゴたち」(山田太一)でも、同様の大学生像が描かれ、学生たちは共感を

持ってみていた。

当時、大学生の実態を実証的に明らかにしたいと、ゼミの学生たちと大学生を対象にした調査を、二、三年に一度実施し報告書を刊行してきた。学生と共同作業をする中で、学生の視点を取り入れられると考えたのである。

『現代大学生の意識と行動——武蔵大と五大学・一短大の比較』（一九八二年）では、六大学八百七十一名の学生を対象にアンケート調査を実施し、大学ごとに学生の意識と行動の差異をデータで検証した。「大学レジャーランド志向」「アカデミック志向」「サークル志向」「クリスタル志向」「就職志向」という大学生の行動類型も因子分析から抽出した。

『大学生の受講態度とその関連要因の研究』（一九八五年）では、学生の授業時の座席の位置が、受講態度のみならず、日頃の行動やファッション度にも関連しているという仮説で、三十三教室で（一教室三人）百名の学生の受講態度を観察した。同時にその学生（およびその周辺の席の学生）に授業後アンケートも実施し仮説を検証した。前の座席の学生は受講態度が熱心で校外でもまじめな行動傾向の持ち主であり、後ろの座席の学生は授業中聴講以外のさまざまなことをし、遊び志向が強いことが明らかになった。座席とファッションの関係は明確にはみられなかった。ファッ

戊果

シヨナブルな学生は、後ろの席に座っているのではないかという仮説であったが、それは検証されず、彼（彼女）らは、授業に出ていないと推察された。

『大学におけるゼミナール、演習の内部過程に関する実証的研究』（一九八六年）では、ゼミごとに教員のパーソナリティや教育観が違い、それに対応して集まってくる学生のタイプも違い、実際のゼミの進め方も違うのではないかと仮説のもとに、武蔵大学の二十二のゼミ、演習で、「担当教員へのインタビュー」「学生へのアンケート」「実際のゼミの参与観察」の三つの調査を行った。「講義型」「一対一型」「討論型」という三タイプのゼミ・演習の型が見出され、ゼミへの満足度は「討論型」で高いなど、ゼミごとの違いを詳細に明らかにした。

『都市における人間の動態の考現学的調査』（一九八八年三月）、および『現代大学生と若者の生念の社会学——試験、サークル活動、部室、価値観、恋愛感、悩み、話し方、余暇、待ち合わせ行動、ライフスタイルの分析』（一九八八年五月）では、大学生や若者の行動を考現学調査（観察）やアンケート調査によって明らかにした。大学生の試験前のノートの貸し借りや部室の様子など、大学生のさまざまな行動が実証的に明らかになった。

これらの学生との共同作業で感じたことは、中堅私立大

学の学生の仲間志向の強さ、そして共同作業での力を発揮するという点である。ゼミ時間の何倍もの時間を仲間と共に作業し、水準の高い報告書を書き上げた。仲間との共同作業の為には自分の時間を犠牲にする人の良さを備えていた。

「ゼミの友人とお酒を飲んでいても、結局最後は調査のことで終わってしまう日々を過ごしました。こんなに人間と仲良くなれたり、信頼したりしたことはなかったでしょう」「新宿駅でスキーに行くギヤル達を横目に見て、『なんで春休みなのに大学へいかなきゃいけないのか』と思いつながら最後まで付き合っていました」「じゃあ、明日総研（総合研究室）十時半ね」一体幾度この台詞を聞いただろう。煮詰まりもうドロドロ。何時しか人間関係は険悪になり、心は古雑巾のようにボロボロになっていた。ああ、ゼミとはこんなに罪作りなものであったのであろうか。春休みは霞のように消えていったのであった。青春なんてこんなものさ——このような感想が、報告書のあとがきに多く書かれている。

このような、共同作業、ゼミ時間を越えた報われない作業は、個人主義的な傾向が強い偏差値の上位の大学ではなかなか成立しない。中堅の大学には、損得を抜きにした仲間志向の強い学生文化が育っていると感じた。

バブル期、バブル崩壊後の大学生

『アクロス』一九八九年五月号の特集「ワガママHankoはどこへ行く」には、バブル期の女性の贅沢な生活が描かれている。当時これを参考に、「上智Hanko」の一日を学生に描いてもらった。次のような当時の典型的な女子学生像が描かれた。

朝は早起きして、授業に真面目に出る。「熱心に聞く講義」「出席して割り当てだけこなせばいい語学の講義」「出席のためだけの講義」を使い分ける。キツイ体育系の部は避け、気が向いた時だけ出ればいいサークル（テニス同好会）に所属。そこで男の子とのつきあひも自然とできる。同性同士で群れることが一番楽しい。教室で、学食で、茶店でと女同士のおしゃべりは続く。八時前に帰宅し、母の料理を食べ、家族とくつろぐ。話題のテレビ番組、好きな音楽、好みのシャンプーに囲まれ、穏な一日が終わる。

これは、豊かな社会の恩恵を十分に受け、自分の義務（授業に出ること）は最低限に果たしながら、自分の好きなことと、自分の好みに合うことをしたたかに遂行する豊かな

なバブル世代の学生の姿である。就職も売り手市場で、楽々と就職の内定を得ていた。

そしてその後、バブル崩壊の不況期を経て、就職難になり、学生たちも就職のことを気にして「まじめ」になり、遊び志向の学生は少なくなっていた。これらをさまざまな大学生調査のデータからも明らかにした。

全国大学生協の調査で、大学生活の重点を、一九八〇年と二〇〇六年を比べると、「豊かな人間関係」(三四・七% ↓一六・九%) が減少し、「勉強第一」(一九・五% ↓二八・三%) と「ほどほど」(一〇・六% ↓一九・六%) が増加している^①。

われわれの研究チームで実施した「十二大学、学生調査」のデータで見ると、「大学生活の比重」に関して、「部活サークル」の比重は減少して(一九九七年六〇・〇% ↓二〇〇三年五六・六%)、「学業、勉強」の比重が高まっている(五〇・七% ↓五五・九%)。勉強重視の傾向は、他の回答でもみられる。大学の授業への出席率が上がっている(八〇%以上) 六二・六% ↑六七・一%、「先生との関係」への満足度が上昇している(七ポイント増)。「試験やレポートで評価するより出席を厳しく」と希望(九・三ポイント増)、「大学は多様な体験の場というより学問の場」と考える(八・八ポイント増)、「学生の自主性に任せるより教員の指

成果

導」を期待(七ポイント増)など^②。

このように学生は、勉強志向やまじめ化傾向を強めていった。その背景には昨今の教育重視の大学改革の影響や就職難に対する学生の対応がある。

大学進学率が上昇するにつれ、大学間の格差も拡大し、大学(類型)ごとに学生の特質や大学生活も大きく違っている。われわれ研究グループでは、「二十一大学、学生調査」(二〇〇三―〇四年実施)で、調査対象の二十一大学をさまざまな指標から三つの類型(「新興大学」「中堅大学」「伝統総合大学」)に分け、その学生文化の特質と大学教育との関連を考察した。

「新興大学」の学生は、部、サークル活動参加率は低い。授業には熱心に出席しているが、それは将来の職業に役立つ資格を取るためである。大学に求めるものは、資格に特化した専門学校的なものであるが、充実した毎日が送れているわけではない。一方、「伝統総合大学」(上智大学はこれに入る)の学生は、部、サークル活動に参加し、大学生活を楽しみ、今の大学に満足しているものが多い。自分に対する自信もある。大学に資格より、幅広い教養やさまざまな体験を求めている。中堅大学はその中間である^③。

大学生文化の特質と大学教育

大学生の学生文化は、高校生のそれより広範な広がりとし深さをもつ。大学生の勉強文化は、大学の学問や授業のあり方とも関連し、また大学外の知識の営みとも連動している。大学生の遊び文化は、時代の最先端を行く青年文化と結びつき、流行や情報やメディアとの結びつきが密でマニアックになる。非行文化は逸脱的というよりは、大人文化への対抗性を強め、対抗文化（カウンター・カルチャー）としての特徴をもつ。現代の学生は、大人や教員に対する表立った対抗や反抗はないものの、権力のある上からの支配の意味を無化する戦略をとっている。私語や代返、ネット情報のコピーなど、いつの時代も教員と学生の攻防は続いている。

現代社会の学生の特質に見合った大学や教育のあり方について、私見を述べておこう。

第一に、大学の授業では、情報の収集やその処理能力、集団討議の中でもものを決定していく能力など、社会で必要な一般的能力を培っている。その潜在的能力が社会で生かされる。また学生は、大学における学問（知）を媒介にしたさまざまな活動を通して人間的に成長する。大学教

育を充実させること、知識の伝達だけでなくゼミや演習での討論や共同作業を通じて、知の創造に参加する体験をさせることが大切である。

第二に、大学生の期間は、子どもから大人になる過渡期であり、根源的知識の探求と厳しい試練がなされる通過儀礼の期間である。そこでは学生の選択性や主体性が尊重される。授業だけでなく部やサークル活動や友人関係を通しての主体的に切磋琢磨することで学生は成長する。多面的な活動をする学生ほど大学への帰属感は高くなる。これからの大学は学生が多面的に活動できるコミュニティとしての特質をもつことが必要であろう。

第三に、一人の学生の成長をトータルに配慮することが今大学に求められている。大学の入学から就職、進学、留學まで、学生の全面的な成長の観点から、きめ細かい学生支援が必要である。

このように、自分の経歴や職場が、自分の研究関心に影響を与えている。

注

(1) 全国大学生生活共同組合連合会「第四二回学生の消費生活に関する実態調査報告書」二〇〇六年。

(2) 武内清編「十二大学、学生調査」二〇〇三年、上智大学

学内共同研究報告書。

(3) 武内清編『学生のキャンパスライフの実証的研究——二十一大学、学生調査の分析』科研報告書、二〇〇五年。武内清編『現代学生の生活と文化——学生支援に向けて』科研報告書、二〇〇七年。

(4) 武内清編『キャンパスライフの今』（玉川大学出版部、二〇〇三年）。

(5) 武内清編『大学とキャンパスライフ』（上智大学出版、二〇〇五年）参照。

筆者は総合人間科学部教育学科教授（教育社会学）

『ソフィア』（219号） 目次紹介

〈特集・のど自慢にみる国民性〉

歌がつなぐ世界——のど自慢と日本人（シンボジウム）

植田康夫 金山智子 小玉美意子

宮本隆治 小林章夫

「NHKのど自慢」が生み出した放送文化——金山 勉

〈リレー・エッセイ 書物をめぐる旅〉

『キユリー夫人伝』原書と新訳と——河野万里子

〈論文〉

イエスとキリスト教

増田祐志

初期キリスト教考古学とイエズス会

豊田浩志

〈講演〉

大学とグローバル化——ピーター・ミルワード

〈展望〉

生徒文化、学生文化への関心——武内 清

ソフィアの本棚